

TAKE FREE

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine
奥多摩町公式タブロイド

リ
デ
ザ
イ
ン
の
き
ざ
し
Okutama Redesign

#16
ISSUE Sixteen

リデザインのきざし

緑深い森林、清らかな水、それらに息づく様々な恵み、そして、多彩なキャラクターや能力を有する人々。人口5000人に満たない小さなこの町だけど、周りを見渡せば実にたくさん「価値」が潜んでいる。そこで今回は、奥多摩の価値を再構築する取り組みに注目してみた。様々な要素を新鮮な感覚で組み立て直し、新たな魅力を生み出す「リデザイン（再設計）」し直す試みが奥多摩のあちらこちらで始まりつつある。

果敢なリデザインによってどんなものが生み出されようとしているのか。この町に胎動し始めたリデザインのきざしに、じっくり目を向けてみよう。

Okutama ReDESIGN

プロローグ・リデザインの達人に聞く

いくつかの「アイデア」と、奥多摩の「未来」

「ひとつの建築だけでも町は大きく変わる。建築にはそんな力があるということ」を僕は日々、感じています。例えば素晴らしい建築がひとつあれば、目に見える形で、もしくは目に見えない形で、様々な波及効果が生まれると思うんです。それはやっぱりリデザインの力であって、デザインは見えないものを見えるようにしていく技法であり思考であり、眠っている魅力を掘り起こして新たな方向性を指し示すものでもある。そんなデザインの力で奥多摩はまだまだと素晴らしい場所になると信じているんです」

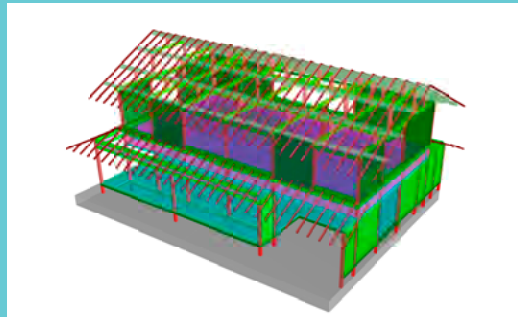
こう話すのは、6年前にこの町へ移住してきた一級建築士の丸谷晴道さんだ。仕事柄、奥深いデザインの見識を有し、その能力を活かしながら実に様々なまちづくりの活動に参加する丸谷さん。まさにリデザインによってこの町の価値を高めるべく、活動が続いている。移住直後、最初に立ち上げたのが「Kiripro」というプロジェクトだった。町内各所を巡りながら奥多摩の暮らしを見つめ直し、体験するワークショップを開催。「桐」という樹木を通して里山の暮らし、健全な森の営みなどにあらためて注目してほしいという思いからだった。

「里山に暮らしていないながらその豊かさに気づいていない方も多い。一方で美しいと感じ

ていた森に入れば、意外にも環境が荒れている現実を目の当たりにする。暮らしと森が密接に関係している現実に関わり、注目のしたいという気持ちで強かったし、生活に影響を及ぼす森の健全性についても皆で考えたかったんです」

そのほかにも町の中心部にカフェを作る活動や、役場新庁舎のあり方を考えるワークショップなど、多岐に渡る活動で町を盛り上げようとしている丸谷さん。今年の春には町外の仲間と連携して奥多摩に新会社「グラデザイン」を設立。空き家の利活用や宿泊事業などによって町全体の価値を高めるのが目的だ。

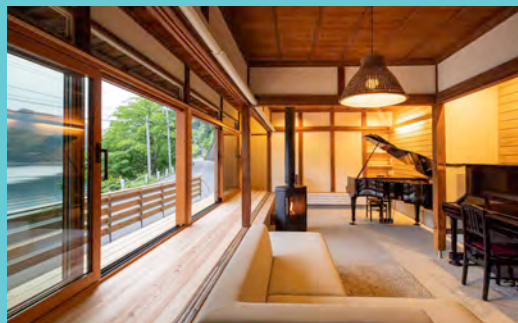
「僕が今、いろいろな形でまちづくりとか森づくりの活動に参加していて大事だなと思うのは、やっぱり人の関わり方なんです。どんな人がどんな形でどう関わっていくのか。この「関わりしろ」をどう作っていくのかが、まちづくりにおいて重要になってくるだろうと。だから新会社では町内外問わず興味のある人たちが奥多摩と良好な関わりを持つ、きっかけづくりをしたい。町内で閉じることなくオープンに知恵や人を集め、リデザインしていければこの町はどんなおもしろい場所になっていくと信じているんです」



海潭の古民家を再生させるプロジェクトを企画。誰もが参加できる再生体験型のワークショップは好評を博した。これは丸谷さんのリデザインによる古民家のCGパース。



奥多摩駅前のスーパーマーケット設立構想案。空き店舗を活用しようとしたこのアイデアは結局、カフェ「奥多摩AUBA」の開店につながっていった。



奥多摩湖畔に建つ、築66年の住居を、丸谷さんがリフォーム。購入者の希望によって2台のピアノが置ける空間を大胆に設計。周囲の自然と調和する和洋のバランスが絶妙だ。



PROFILE
丸谷晴道さん

奥多摩町海潭在住。丸谷建築研究所主宰。設計士として日本各地の住宅、商業施設などの企画・設計を幅広く手掛けながら、奥多摩のまちづくり、森づくりに注力する。

BLUE+GREEN JOURNAL もリデザイン！

特集のテーマにちなんで、本誌も今号はちょっとしたリデザインを実現！通常は左ページから始まる横組のデザインを、今号は右ページから始まる縦組みのデザインに。いつもとは違う雰囲気、感じてもらえるでしょうか？



職人道具でシルバーアクセサリーの製作を体験できる。修理やオーダーメイドの相談も。カフェコーナーは妻・舞さんが切り盛りし、軽食やスイーツも。コーヒーは外のベンチでも飲用可。作品はウェブショップでも購入できる。

4 アルソミトラ

住所：奥多摩町氷川1389
営業/ 10:00~18:00
水曜・木曜定休
@daikichi_alsomitra

地金を手作業で加工
本格アクセサリー！



3 奥多摩アウトドアステーション やっちゃえ(仮)

住所：奥多摩町氷川1407-6
営業/ 金土日
11:00~20:00
@okutamaoutdoorsta



奥多摩生まれの戸田さんが、幼馴染と二人で運営。各地で音楽活動をしてきた戸田さんが、コロナ禍をきっかけに奥多摩に帰郷。周りの友人のためになんでも屋を始めたが、その延長線の活動としてこのアウトドアステーションをオープン。荷物預かりなども行い、軒先は無料休憩所として開放。



交差点の角にある駅前の一等地。町所有の物件を活用し、2022年より連携協定を締結した多摩大学が地域活性化拠点としてプロデュース&運営。内装には多摩産材を使用。気さくな学生たちが切り盛りする空間で、奥多摩を散策する前の充電を。この日の店番、太田さん(左)と青木さん(右)



1 奥多摩AUBA

住所：奥多摩町氷川197-5
営業/ 9:00~12:00



関東の駅百選にも選ばれる
JR 奥多摩駅からスタート

午前10時の奥多摩駅。湿った空気はやや涼しく、駅舎裏手の山々には雲がたちこめている。住民よりも観光客の姿が目立つこの駅前通りで、昨今、空き店舗が新たな形で活用され始めているという。いったいどのような変化が起きているのか、自分の足で確かめてみることにした。

まずは駅舎を出て左へ。ゆるやかな坂を下ると現れる交差点。その一角にあるのが「奥多摩AUBA」だ。元は釣り具屋だったという建物の引き戸を引くと、シンプルなカウンタにコーヒーマシンが鎮座する清潔な空間が広がっていた。テーブル席も少々。店番として立つのは、多摩大学経営情報学部・松本祐一ゼミ所属の太田隼人さんと青木太一さん。「ゼミ生や、地域の人々が店頭に立っています」という。AUBAは、気軽に立ち寄れるカフェとして、また、地域活性化の拠点としてオープン。松本ゼミによる足掛け数年にわたる地域活性化プロジェクトの構想が、2024年8月に実現したものだ。自身も店番に立つことがある地元住民であり、「新しい奥多摩をつくる会」のメンバーでもある濱野和枝さんは、「この辺りには朝から開いてやるカフェもほとんどないし、地域の人と協力できる場所ができるのはとてもいい取り組みだと思います」と嬉しそうな表情を見せた。集会用スペースとしてのレンタルも想定しており、夜の奥多摩でこの空間に明かりが灯っているとホッとすると、いう好意的な意見も聞かれるそう。取材当日は店内で駄菓子出張販売がされており、親子連れが賑やかに過ごしていた。

AUBAを出て向こう側の建物には、「Super Oatmeal」の文字が。しかしこの建物、スーパーとしては2019年に閉業。現在は「奥多摩フードコート」として生まれ変わり、2024年10月現在、3店舗が営業中である。

中に入り、人気ラーメン店「三ツ杉」の「奥多摩わさび中華そば」を注文。各種のだしを混ぜて作った上品なスープからわさびの風味がアクセントとして立ち上がる。三ツ杉は、元々は福生にあった「麵処しんすけ」が移転し、店名変更して再スタートしたお店。店長の小林慎介さんに話を伺うと「志茂さんの熱い想いを聞いて、奥多摩で役に立てるならそれに応えたいなと思ったんですよ」と感慨を語った。

この志茂さんとは、「故郷である奥多摩を再び活気ある場所へ」と意欲を見せる、駅から程近い周慶院の住職志茂剛之さんのことだ。志茂さんが子供の頃、約1万2000人いた町民が今では約4500人まで減少。駅

前の街並みも大きく変わったという。

「永平寺で修行を終えて久々に幼少期を過ごした奥多摩に帰ってきたら、以前よりもつまらないところになっていて。何かしたいと思ったんです。子どもたちにも、町で過ごせる空間があつてほしい。ちよつと楽しみで外食するにも電車に乗らないといけなくて嫌ですよな」

フードコートは、そんな想いから立ち上がった構想だった。この日も新たに入店希望の事業者とこれから面接予定ののだと話していた志茂さん。「なんでもいいという訳ではないんです。必須条件は子どもが喜ぶ店であるかどうか」と迷いなく話す姿が頼もしかった。

さて、フードコートのある交差点から橋を渡って下へ降りると、古民家風の建物が、看板には「OKUTAMA OUTDOOR STATION」とある。ここを運営するのは戸田泰拓さん。

隣の建物の家主から食堂エリアを借り、アウトドアを満喫するために奥多摩を訪れる人々のためのサービス施設をオープン。奥には川を見ながらBBQができるテラススペースも。今は飲食店として運営をしつつ、今後時間をかけて進化していく予定だという。建物そのものも現在進行形で進化しており、DIYで改修に励む。話をするうち、ドラム缶を利用した手作りの炉で、串刺しのヤマメが焼けた。美味いんですよ、と、朗らかに魚の説明をする戸田さんの姿に、故郷に貢献したいという優しい思いを感じた。

次に向かったのは、2023年12月に閉店した老舗カフェ「農家(ホーム)ロック」跡地。ここに居抜きで入ったアクセサリーショップ「アルソミトラ」が、この日がまさにプレオープンしていたのだ。民族的なモチーフのアクセサリー作品や、職人道具の雰囲気、ホームロック時代から引き継いだ内装と非常にマッチしている。

「奥多摩には自然の中での体験が多い。一方で室内での、例えばアクセサリー製作の大きな体験ができる場所は少ない」と代表の岡田樹さん。

そのため、店内では作品購入のみならず、アクセサリーの製作体験も可能。さらに店のカフェエリアでは、妻の舞さんが淹れるコーヒーや軽食も楽しむことができた。奥多摩を訪れる人々にとって、アウトドア以外にも好奇心を満たせる場所があることは非常に魅力的だ。山小屋風の工房に、気分も上がる。

工房を出て最後に向かったのは、2階建ての小さな民家を活用したミニ駄菓子屋「サンマル」。可愛らしいロゴと奇妙な名前。サン



2023年に奥多摩町に移住した村上さん(写真右)。子どもの利用は無料。大人にはクリームソーダなどのワンドリンク制で収益化を見込むほか、棚の一角を利用した品物の陳列などを有料レンタルする構想も。大人の積極的な参画を促しながら、子どものため自由な場づくりを目指す。



Text/Naoya Aoki

5 ニュー駄菓子屋サンマル

住所：奥多摩町氷川151-1
営業/ 平日 14:00~18:30
土日祝 10:00~17:00
月・水・金曜定休
@dagashi_sanma



サイドプレイスとしての
新感覚・駄菓子屋



周慶院住職の志茂剛之さん。空き店舗や空き家の利活用の相談が来ることも多いという。歴史ある寺院をより使いやすくなるため、ライティングを工夫したり、自らの考案した冷房システムを導入していたり、身の回りのリデザインも欠かさない。

Walking around Okutama Main Street 奥多摩駅周辺のリデザイン現場を訪ねて

奥多摩駅周辺では、長く愛された老舗の閉店が相次ぐ。しかしその流れに抗うように、空き物件の新たな利活用が増加中。その取り組みを巡る散歩へ。

2 奥多摩フードコート

住所：奥多摩町氷川195
奥多摩清流中華そば 三ツ杉
※営業日および時間は変動あり、SNSを要チェック
@mendokora.shinsuke

ビビカレー
営業/ 11:30~売り切れまで 不定休

54cafe&crepe 奥多摩店
営業/ 11:30~ 不定休
@54cafe_okutama



ラーメン、カレー、クレープと、大人も子どもも嬉しいグルメが揃う。品目を示す看板がいくつもぶら下がり、スーパーの面影を残す面白い作り。高座のようなスペースを利用して落語やライブ等のイベントが開かれることも。新たなテナントの入居予定もあり、更なる進化が期待される。

観光も日常も盛り上げる
フードコートの存在感

Satologue

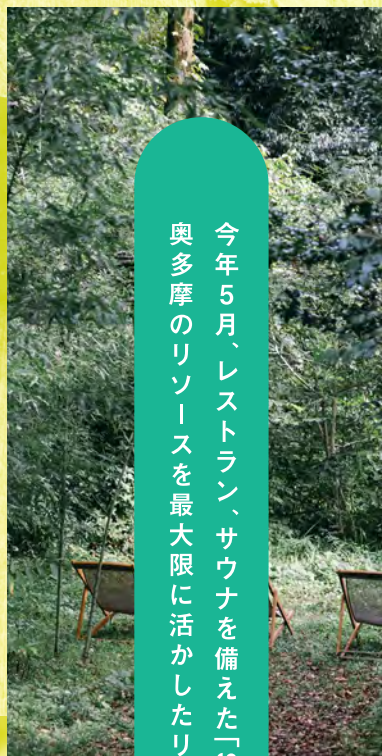
奥多摩とつむぐ新たな物語



Satologue

完全予約制のレストランとサウナを併設。来春にはツインルーム4部屋の宿泊棟をオープン予定。レストランは昼のみで料金5,500円（税込/季節のメニュー5品程度/奥多摩町民は1,000円引き！）。サウナは半日プランで料金22,000円（税込/2名まで/3名以上は1名あたり追加料金税込7,700円）から。運営会社の沿線まるごと株式会社では、移動に便利な電動トゥクトゥク「emobi」（タイなどで普及する三輪自動車）や電動アシスト自転車「HELLO CYCLING」のレンタルを鳩ノ巣駅で実施中。

住所：奥多摩町棚澤1
<https://satologue.com>



今年5月、レストラン、サウナを備えた「Satologue（さどろぐ）」が古里駅と鳩ノ巣駅の間に誕生。奥多摩のリソースを最大限に活かしたリデザインの手法と背景にフォーカスしてみよう。

デザインしすぎないという リデザインの思想

JR古里駅から歩いて約15分。絶景の山林と河川を間近に臨む棚澤に「Satologue」はある。周囲の自然や古民家と調和しながら、訪れた人にさりげない高揚を喚起させる和モダンなライストの建物。著名建築家の堀部安嗣氏、伊藤嘉紀氏らの手によって築100年以上の木造民家を改修したという。中に入ると眼前の山林が視界いっぱい広がり、建物全体に使用されたスギ・ヒノキの香りがほのかに香る。この開放的な空間はフレンチベイスのレストラン「時傳路/TOKEIRO」。階下では奥多摩の木材を利用するラグジュアリーな新サウナを楽しめる。川の水を引いた風呂に、森の緑と新鮮な空気を目一杯体感できる外気浴。来春には併設の宿泊施設もオープン予定だ。これまで奥多摩にはなかったタフの複合施設「Satologue」はどのようなデザイン思想のもと作られたのだろうか。

「ここは、樹木や川、動物、風や土など、身近な資源をそのまま活かしながら、奥多摩の魅力をあらためて感じてもらえる場所だ



PROFILE
波辺舞さん

沿線まるごと株式会社 コーディネーター。以前は群馬県でJRの車庫さんとして活動。地域活性化事業に興味を持ち、「Satologue」運営に関わるように。



景色満面の様まで 里山のストーリーを伝承

「Satologue」を訪れた人をもてなすのは4人のメンバー。そのうちの1人、施設の運営・配人を務める秋山拓実さんは敷地内の森を案内してくれ、食事前の15分間、訪れた人がこの地の自然の豊かさに触れられる貴重な時間。いくつかの作物を栽培する自家農園やビオトープ（生き物の暮らす場所）そして、さまざまな水や空気の循環によって豊かな土壌が育まれるサイクルを目の当たりにすることができる。自然環境を壊すことなくリデザインされたビオトープでは、アメンボやイモリなど様々な生物の営みについて、秋山さんが説明してくれた。

「スタッフ全員で決めた接客のスタンスに、奥多摩の文化、歴史、食、自然などについて僕ら自身がきちんと学び、様々なストーリーを自分たちが語り部として、喜びに満ちながらお話ししていると考えています。ですからフレンドリーなスタッフのときどき美味いレストランにはありますが、インスタグラムのコメントやLINEにも楽しんでいただきながら、開



PROFILE
秋山拓実さん

「Satologue」運営配人。2022年に国分寺市から奥多摩へ移住を果たす。かつては、バックパッキングで世界を巡る旅に没頭。

Photo/Mariko Yamaguchi

じららずに心地よくリラックスしていただける場として利用していただきたいんです」。「Satologue」が建つのは、かつて林業の要衝として木々に利用された場所でもある。奥多摩でとれた木材をここでイカダに乗せ、多摩川を利用して都心まで運んでいたのだ。

「そんな歴史についても知っていただきたいです。すじこうした林業のストーリーをここで提供するサービスに組み込めないかと考えたんです。そこで、奥多摩の木材を薪にして、階下のサウナで利用するとか、この集落に住む林業関係者から炭を提供していただくというアイデアが生まれました。燃やした後の灰は畑に巻いて作物の栄養にしたいという自然の「循環」も感じていただきながら、食事やサウナを楽しんでいただきたいですね」

今は奥多摩の知識を深めることに何より興味があると話す秋山さん。情熱的な彼らスタッフとの関わりが、「Satologue」のリアルな魅力を増やす原動力ともなっているようだ。



FOOD

Photo/Mariko Yamaguchi

「鮎の苔玉コロッケ」 鮎の葉やバセリを苔に見立て、鮎デザートは、東京狭山茶のジュレとルのコロッケとあわせて苔むした奥多摩の美しい情景を表現。葉サの家にある、いちじくの葉をお振分けンショウとニンニクのアイオリいただき、香りに活かしている。ソース、自家農園で育てているハッピーはもちろん、奥多摩の人気店ラペーニョの葉を飾り添えた。 「Gotta Coffee」より。

「東京和牛の炭火焼き」 爽やかな赤身の和牛を2種類のソース、自家農園で育てているハッピーはもちろん、奥多摩の人気店ラペーニョの葉を飾り添えた。 「Gotta Coffee」より。

「内沼きのご園のキノコの焼きリゾット」 爽やかな赤身の和牛を2種類のソース、自家農園で育てているハッピーはもちろん、奥多摩の人気店ラペーニョの葉を飾り添えた。 「Gotta Coffee」より。

「白ス、もうひとつはSatologueで仕込んだお味噌のソース。庭で摘み、奥多摩が誇る「TOKYO WASABI」だオクラの花のフリット、キノコ、小が鎮座し、口の中に「和」の絶妙な松菜を添えて奥多摩らしさを演出。ハーモニーが響く一皿。

かつて、東京青山の人気レストランで働いていた料理人の駒ヶ嶺さん。昨年、奥多摩の山奥でユニークなレストランがスタートすると聞き、強い興味を覚えたという。

「お客様にとって第2のふるさとのような場所にしたんだと社長から聞かされ、シェフとしてのいろいろなイメージをふくらませてきました。当然、リビートしていただきたいので2ヶ月くらいのペースでメニューを変更しています。皿ごとに、必ず奥多摩産の食材を採り入れながら西多摩エリアの生産者さんたちが作った食材も利用しつつ、メニューを組み立てています。また、レストラン前の庭で作物を栽培したり、近所の方が持ってきてくれる野菜を利用させてもらったり、地域の人や風土と密着しながら料理を創作しているんです。奥多摩をはじめ、西多摩エリアならではの食材がこんなにも豊かだということを知っていただきたいですね」



PROFILE
駒ヶ嶺 侑太さん

2024年5月にオープンした奥多摩のレストラン「Satologue」ヘッドシェフ。東京の中心部で数年間、料理の修行を経て、この春、西多摩エリアに移住。



地形を見て地中の水の流れを読み取りながら、森に道を作っていく
Photo/Shinnosuke Suzuki



森×リデザイン

奥多摩の森は、すぐそばにあるもの。しかし「日常的に利用する存在」であるとは限らない。今よりもっと気軽に山に入るために。

Okutama Redesign Story I



Text/Naoya Aoki

面積の94%が山林という奥多摩町であっても、気軽に裏山に入るような遊び方は昔ほど身近とは言えない。一方で昔からこの町で暮らす人々に話を聞けば、幼少期に野山を駆け回った思い出を楽しそうに語ってくれる。梅澤在住の濱野文夫さんも、その一人だ。

「かつて林業が盛んで生活にも薪が必要だった時代は、山の木々を伐採したり、枝を集めたたりすることは生活の一部だったし、その営みによって集落周辺の山や景観が整っていました。子ども達の間でも山や川での遊び方を教え合うのが普通のこと。自然の存在はいつも身近だった。今は随分と状況が変わってしまったけれど、地域のためになることをしたいと常々考えていました」

そんな中、奥多摩町でまちづくりに取り組む建築家の丸谷晴道さんとカヌーインストラクターの後藤めぐみさんから、濱野さんが所有する裏山を資源として活用しないか、という提案があった。自宅の裏山を整備し、地域内外の人が気軽に訪れることのできる「開かれた森」として再定義する。伐採した間伐材は、貴重な資源として地域で循環させていく。そんな心躍る提案に、濱野さんは二つ返事で同意した。

裏山の名前は、ミナモリ(皆守り)。「奥多摩DIY教室」と題したプロジェクトが奥多摩町のまちづくり推進事業として採択された2023年には、後藤さんを講師に迎え、大人も子どももスコップを片手に参加する



右) 古くから梅沢の地を見守ってきたタブノキの巨樹が森の入口に
Photo/Shinnosuke Suzuki
左上) 地域の子も達がブルーベリー収穫を楽しむ
Photo/Takashi Hamada
左下) たわわに実ったキウイ

漁業協同組合×リデザイン

一時は解散も視野に入っていたという小河内の漁業協同組合。それがいま、地域おこし協力隊の助力を得ながら、建て直しが図られている。

Okutama Redesign Story3



左上) 地域おこし協力隊の金田一慈子さんと市原達也さん
右上) 大きく育った奥多摩やまめ
左下) 揚げやまぼこ
中下) やまぼこのすり身を使ったしんじょは絶品
右下) やまぼこ試食会での西方亮さん

清流に恵まれた奥多摩町には、渓流釣りが楽しめる釣り場がいくつもある。その運営や、川魚の養殖、河川への魚の放流、遊漁券の販売などを行うのが、各所の漁業組合だ。しかし、近年は高齢化と営業不振によってその存続が危ぶまれているところも。東京都の最西端、峰谷川渓流釣り場に事務所を置く小河内漁協もそのひとつだ。しかし、3年前から地域おこし協力隊が入隊したのをきっかけに、その状況が一変しつつある。

漁協復興のキーとなるのが、奥多摩名産のヤマメだ。

「稚魚を育てるために奥多摩豊かな養殖センターで採卵された後の2.5tの親のヤマメは、今まではすべて焼却されていました。そのヤマメを利活用して、小河内漁協の地域おこし協力隊、東京都食品技術センター、奥多摩やまめ養殖センターが協働して研究開発に取り組み、生み出したのが「やまぼこ」という加工品です」

そう語るのは、地域おこし協力隊3年目の市原達也さんと金田一慈子さん。「やまぼこ」とは、採卵後のヤマメを原料にしたすり身や練り製品のこと。淡水魚での練り物は珍しく、すり身と揚げかまぼこを業務用として製品化。新たな奥多摩名物として定着を図っている。また、商品開発以外にも、二人は漁協運営支援にも尽力。たとえば、今までは魚を一時的に保管しておくためだけに使用されていた釣り場内の池を、養殖用水槽として利活用。育てた魚が出荷されるまでに至っている。

「健全な漁協の活動の土台のひとつをつくれたことには、やりがいを感じます」。

そして、二人に続く形で2024年、新たに加わったのが西方亮さんだ。きっかけは、「奥多摩やまめ」の魅力に惹かれたから。奥多摩やまめとは、2年以上生存し、40〜50cmまで大型化するヤマメのこと。刺身で食べることができる。初めて食べた時、その美味しさに感動したんです。一口食べて、これは養殖ビジネスもいけるんじゃないかと可能性を感じました」と話す西方さんは、奥多摩やまめをきっかけに小河内漁協の立て直しのみならず、「水産業を、それに携わる人が生活していける産業」として復興したいという強い思いを持つ。新たに水産会社を起業し、漁協での協力隊任務と自社事業の両輪を相乗効果が生むように稼働させながら、奥多摩の漁業を盛り立てようとしている。

「鮮魚としての奥多摩やまめの取引拡大に動いていて、すでに都内の飲食店など新規取引先が増加しています。また、魚の大きさや尾数の正確な把握など、より効率的な生産管理の体制も整え、任期中に黒字化していく計画です」

若く新たな人材のアイデアと行動力で、40年以上続く漁協組合のリデザインは進む。

右&中) 瑞穂町にアトリエを構えるアーティストMABOさんによる、銅板造形の個展。
左) 奥多摩に縁のある50人の人々による「50の本棚展」



美術館×リデザイン

かつて1987年に「むかし絵美術館」として開館した歴史を持つ「奥多摩町立せせらぎの里美術館」(改称93年)。町唯一の美術館として在るべき姿へのリデザインが進んでいる。

JR御岳駅から川沿いの遊歩道を歩いて20分。美しい木立に囲まれた「奥多摩町立せせらぎの里美術館」に辿り着く。この美術館に変化をもたらしているのが、自身が個展をしたことがきっかけで縁ができたという、奥多摩町在住の美術家、銅柄大気さんだ。コンセプトは、小さくてもユニークな美術館」と話す銅柄さんは、2021年から美術館のディレクションを手掛けるようになり、現在は年4回ほどの企画展をプロデュース。地域の作家たちの魅力を捉え直し、その本質を伝える個性的な展示は、度々話題を呼ぶようになった。

作品をただ展示するだけでなく、空間全体を活かしたインスタレーション・アートを表現する場として美術館をリデザインしたことも、銅柄さんの大きな功績のひとつだ。例えば、美術家の佐塚真啓さんによるおぼけ館「美術やしき」展。この時は、音や仕掛けを通して、お化け屋敷を感じる演出を実現。あるいは、銅板造形作家・MABOさんの個展では、1階スペースを銅製の植物が埋め尽くし、さながら花畑のような不思議な空間が完成。そうしたユニークな展示実績から、昨今ではこの「個展をしたい」という作家からの問い合わせも増えているという。

また、美術館という箱そのもののリデザイン

Okutama Redesign Story2

ンも手を入れられる範囲で実施している。もとも美術館の建物は、むかし絵画家松下記久雄氏の作品を展示する目的で建築されたものだ。そのため、松本氏の世界観に合わせた古民家風の造りになっていること、照明が壁面の絵画を照らすことだけに特化していたことなど、自由度の高い展示を行う上では様々な障壁があったという。そこで昨年、町の予算でライティングレベルの取り付けや、一部の壁を取り壊すことで空間を広く見せるための改修を実施。展示空間の機能性と魅力を高めることに成功した。



2023年8〜9月に開催された美術家の佐塚真啓さんによる「おぼけ館_美術やしき」



2020年の銅柄大気展。「線をつくる。余白がうまれる。」というキャッチコピーとともにインスタレーション作品を展示

美術館の入口は馬小屋をモチーフに作られていたが、改修時に馬のオブジェを撤去。展示の案内板として機能するウィンドウを新たに設置した

2015年に奥多摩町にアトリエを構え、2016年に移住した銅柄さん。「地域クリエイション」をテーマに様々な地域活動を行う



KIKORI CAFE

住所：奥多摩町棚沢403

営業 / 10:00~17:00 不定休

@kikori_cafe_tokyo



無駄を出さない設計

テーブルや本棚など、どんなものでも作り始める前にまずは緻密にイメージして、必ず設計図を描くという小澤さん。サイズは基本、尺単位で決めているという。「材料の無駄が出ないんですよ。僕はホームセンターで材料を買ってくるんですが、日本の既製品は尺単位。それに合わせた寸法で設計すれば材料を余らせなくて済みます」。



釘とビスの使い分け

インパクトドライバーでビスを打っていくやり方は効率がいいが、ビスが悪目立ちすることも。そのため、目に見えるところは飾的に丸い釘を打ち、見えにくい部分はビスを使用。例えば、DIYで組み立てたテーブルの表側は釘、目立たない足部分はビスを打ち、上から黒く塗っている。



同一塗料×黒で統一感を演出

空間に統一感を出すために、カタチは違えど、素材、塗料は同じものを使用。そして、差し色には黒色を採用している。「塗料は、オイルステインで統一。親父は油性だったけど、僕は水性派。新品でもピカピカにならないし、経年変化でさらにいい味になります」。ちなみに、店内のドアはすべてお手製。サイズもデザインも異なるが、統一感がある。



道具にこだわる

DIYは道具が命。「丸鋸とインパクトドライバーは、プロ用を揃えるのがおすすめ。僕はマキタ製のものを使っています。DIYだからといって低グレードのものを買って、安物買いの銭失いにならないように。精度が求められる直角定規は、老舗のタジマ製をチョイス」。写真は、小澤さんの7つ道具。この道具があれば、基本的なDIYはすべて完結。



目隠しもおしゃれに

設計図通りに作ってみても、DIYではちょっとしたズレが生じてしまうもの。フローリングやフロア張りなどで隙間ができたときは、巾木を張って目隠しを。黒色で統一すればデザインの差し色に。ちょっとした穴や傷は、小さくカットしたトタン板で塞いでいる。



アイアンペイントでインダストリアル風

「溶接の技術がないから、木の空間でいかに“それっぽく”見せられるかをやっている」という小澤さん。そこで重宝しているのが、アイアンペイント塗料だ。木材に塗るだけで鉄のような質感に。黒を基調としたインテリアなので、黒色を使用。

訪れた客は、その居心地のいい空間がほぼDIYと知ったら驚くだろう。人気カフェの店主に聞いた、こだわりのリデザイン&DIYについて。

KIKORI CAFE に学ぶ DIYリデザイン術



伊藤 菜穂さん

2024年6月、奥多摩湖畔の廃校を利用して映画やキッチンカー、音楽ライブなどを楽しめる親子フェス「KURUMI DAY」が開催された。町外からも多数の集客を実現したこのイベントの主催は奥多摩や青梅の有志数人で発足したチーム「おくたま子育て環境向上委員会「KURUMI」」。発起人は町内に住む伊藤菜穂さんだ。2022年に授かった二人目の子がダウン症だったことが、この会の発足につながった。

「奥にチャイルドを通さなければ栄養を摂れない」という摂食障害もあり、この町でこの子を育てていくのか、とても不安になったんです。同じような障害を持つお子さんも奥多摩にはおらず、相談できる人も限られます。とにかく誰かに助けてほしいという気持ちから知人に事情を話し、私の悩みに応じてくれた奥多摩や青梅の友人たちと「KURUMI」を立ち上げることになっていったんです」

目指すのは「インクルーシブな子育て環境」。有益なサービスマンや人の優しい気持ちで、どんな境遇の子とも取り残さない環境づくりを少しずつ進めていきたいと話す。「適切な支援が受けられるよう関係各所へ掛け合ったり、都市部では普通に存在している児童発達サービスが奥多摩にはない事実に落胆したり、私たち家族だけでは抱えきれないたくさんの悩みが正直、あります。いっそのことここが便利な場所へ引っ越した方が家族のためになると考えたこともありましたが、でも私たちが何もしずこの地を去ってしまうば、いつか同じような境遇の家族が奥多摩に住むようになった時、その家族はまだ私たちと同様の悩みを抱えることになるわけです。だから、今、奥多摩でできる限りの環境づくりをしておこうと思うようになったんです」

今後は楽しいだけのイベントに限らず、親子でインクルーシブな環境とは何かを実感できるイベントなども開催したいと話す伊藤さん。多様な背景を持った子どもたちが皆、楽しく過ごせるようまずは周囲の理解を得ることに注力するとのことだ。

2024年6月に旧小河内小学校で開催された「KURUMI DAY」の様様。ユニークな教育方針の小学校を取り上げた映画上映を中心に、親子で一日楽しめるイベントになった。



奥多摩に 「インクルーシブ」な 生活環境を

子どもたちのライフスタイル × リデザイン



取材日にはサッカーのイベントが開催され、10名弱の子どもたちが体育館に集合。子どもたちにとっては専門家のレクチャーに触れられる貴重な機会となった。

放課後の過ごし方に 「感動」を

小学生に新たな 発見の場を提供

奥多摩のような山間部では放課後、子どもたちが友達と自由に遊ぶことが意外に難しい。徒歩で移動するしかない小学生たちは、友達の家で自力で行くとか、帰宅してからまた学校へ来るといったことが困難なケースも多いからだ。そんな子どもたちのために存在するのが町営による「学童保育」。これだけでも仕事などで忙しい親にとっては助かっていたが、2024年春からは新たに「放課後こども教室」なる事業がスタート。氷川や古里の小学校において空き教室や校庭を利用し、子どもたちに向けた楽しい場が設けられることとなった。奥多摩町役場で福祉に関わる金丸哲史さんはこう話す。「子ども居場所づくりを充実させたいという思いで『放課後こども教室』はスタートしました。『学童保育』は登録制で負担金なども生じる制度ですが、『放課後こども教室』は、奥多摩の小学生なら無料で毎日、自由に参加でき、平日は放課後から17時まで学校で遊んだり、学んだりすることができます。英語教室や工作教室、ボウリングやサッカー、ヨガなど幅広くメニューを用意し、子どもたちが主体的に活動できる場を提供すべく、これからは工夫を重ねていこうと考えています」

「学童保育」と「放課後こども教室」は相互の連携も考慮してどちらも今年春から、民間の専門事業者に運営を委託。子どもたちとの関わりに慣れた専門家たちが毎日、楽しい場をプロデュースする。委託事業者「明日あしたば」の清水光さんに今後の展望を聞いた。

「学校の授業だけでは出会えない興味の対象をこの場で提供できればと思っています。スポーツや英語も続けていきますが、環境への意識を高めるエコ活動なども探り入れながら社会とのつながりを感じられるメニューなどどんどん検討していきたいですね」

町内住民が講師になることによって、オリジナルメニューの追加も考えていきたいと話す清水さん。奥多摩の小学生や保護者にとって、心地よいリデザインが始動し始めたようだ。



金丸 哲史さん(左)
清水 光さん(右)

「木工作家や古物商だった父の店はギャラリーを兼ねていて至るところに作品があった。独特の雰囲気はありましたが、一見さんは入りにくい雰囲気。この店の光りは、なんと言ってもこの絶景。それが活きるような空間であり、店のどこを撮っても映える空間にしたいと考えました」

建具や家具をつくる木工作家の父の背中を見て育ち、物心ついた頃からあのつくりが好きだったという小澤さんは、学でDIY技術を習得。約7カ月間かけて、たつたひとりで店の改装に奮闘した。30年前に父と一緒に行ったという無垢材の床と天井はあえてそのまま残しながら、テーブル、本棚、壁、ドア、小上がり空間に至るまでを新設し、統一感のあるモダンな空間が完成。前述のコンセプトに「自分自身が毎日行きたいと思える理想の空間であること」。無骨でインダストリアルなスタイルが好きという小澤さんは、木の空間との調和を図りながらも、そんなスタイルリッシュな世界観を目指したという。

「自分はプロじゃないから、大工さんが見たら笑っちゃうかもしれないけど、DIYならではの粗も含めて全部が味、だと思ってる。逆に言えば、大工さんにはこれは作れないから。考えたんだけど、DIYのDは道具、Iはイメージ、Yはやる気だよね。この3つが揃っていれば、DIYは本当に楽しい。既製品にはない思い通りのものを作ってお金もかからないんだから。親父が今の店を見たらどう思うかって？ あつさりーことやってんな、つて言うんじゃないですかね(笑)」

第6期長期総合計画

平成27年3月に策定された「第5期奥多摩町長期総合計画」が令和7年3月をもって終了となり、令和7年4月から新たにスタートするのが「第6期奥多摩町長期総合計画」となる。第6期は「住民等との協創」が重要なテーマとして掲げられ、まちづくりをさらに発展させることを目指す。



町内外の有志が集まり、将来のまちづくりについて考察したワークショップの様子（Photo/Mariko Yamaguchi）



奥多摩の未来をデザインしよう

〔第6期長期総合計画〕にみる、この町のこれから

町の行政は「長期総合計画」と呼ばれる基本計画に沿って進められる。2025年春から施行予定の「奥多摩町第6期長期総合計画」策定に深く関わるキーマンの話から、この町の未来を夢想してみよう。



PROFILE

松本祐一さん

多摩大学経営情報学部 教授。多摩大学総合研究所 所長。専門はソーシャルマーケティング。学生たちとともに理論と実践の両面から奥多摩の町政に深く関わる。

2025年4月から新たに始まる「第6期長期総合計画」。約10年の間、この計画に沿って行政は進められていくことになる。この第6期計画策定に深く関与し、現在進行形で奥多摩の未来構築を強力にサポートしているのが、多摩大学経営情報学部の松本祐一教授だ。

「私が奥多摩と関わるようになった約10年前、町政に強い興味を抱いている町外の方が多かった。住んでいるわけではないが、働く場所として遊ぶ場所として関与する方々が奥多摩の未来を考えているという構図。奥多摩はそういう場所なんだな。ならば、町内外問わずに思いやアイデアを出し合って町のあり方を考え、実行していくのは面白いやり方だろうと感じました」

第5期長期総合計画の中間評価に関わった松本教授は、第6期の計画立案においてリーダーの役割を任されるようになった。今はまさに計画立案の真っ最中だ。

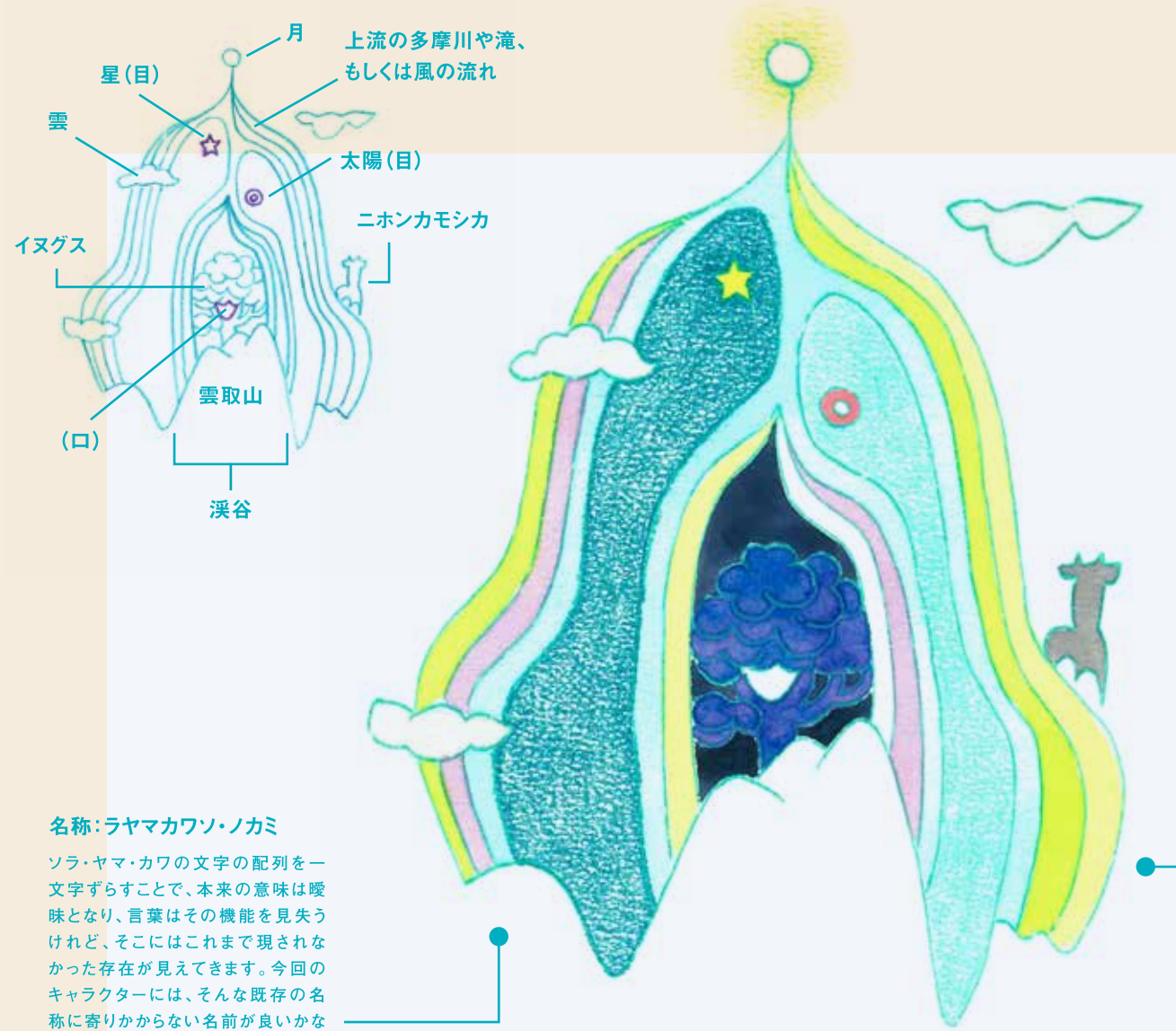
「私が第6期の策定に関わり始めたのと同じ頃、町民の方々が町政に対する積極的な提言が自然と出てくるようになった。この状況を見て、計画策定には町民はもちろん、オゾンに意見を募るとより実のある計画になるだろうと思っただけです。加えて、未来の話です。若いうちから中心に計画を練ったほうがいいだろうと意見し、町役場内で若手中心のメンバーを構成してもらったんです」

人々の声を丹念に拾うため、希望者を募って数回のワークショップを開催。そこで出た多様な意見を集約し、第6期計画の骨子ができあがっていく。

「第6期計画では、子育てとかデジタル化といったカテゴリー別に考えるのではなく、活性、持続化、効率化の3つのコンセプトで理想の町政を考えていったことがまず新鮮で、他の市町村ではあまり前例がないと思います。特に効率化の部分は特徴的で、たとえば役場内の定期的な配置転換を止め、高度な専門性を持った人材育成に努めるとか、窓口業務を縮小し、デジタル化を追求することでマンパワーの課題に対応とか、土地利活用のため空き家の解体を推し進めるといった項目が含まれます。つまり足し算の要素だけでなく、効率化を目指す上で引き算の要素もリストアップしていくことで、財政難や人口減といった大きな課題に対し、現実的な対策を打っていかないと考えただけです」

まだ確定していないため第6期計画の詳細を報告することはできないものの、町内外からの意見を集約した斬新な計画になるだろうと松本教授も大鼓判を押す。

「若い人たちの想いを最大限探り入れ、若い方々が挑戦できる、楽しめる町にしたい。こういう部分はメンバー全員、強く意識しています。また、町内で閉じずに町外の方に向けて開かれた町であるべきという部分もメンバー間で共有できています。計画の文言には「私」という主語を入れているのもポイント。町が町政を行うというより、町に関与する一人ひとりがプレイヤーであり、意見を出せる、町政を実行する立場であるという趣旨です。第6期計画の策定をぜひ、楽しみに待っていていただきたいですね」



名称:ラヤマカワソ・ノカミ

ソラ・ヤマ・カワの文字の配列を一文文字ずらすことで、本来の意味は曖昧となり、言葉はその機能を見失うけれど、そこにはこれまで現されなかった存在が見えてきます。今回のキャラクターには、そんな既存の名称に寄りかからない名前が良いかなと考えました。「ノカミ」と付けたのは、古事記にちなんで見ました。様々な現象すべての存在に宿る、日本古来からの神様のように大きな存在感を持つようなキャラクターとして。



キャラクター・バリエーション

「ラヤマカワソ・ノカミ」は何かひとつに固定されない代わりに、色々なものに姿を変えられるという特徴も持っています。奥多摩の「いきもの(動植物など)」のさまざまな姿を变幻自在に纏うことができる設定を与えました。



PROFILE

伊藤弘二さん (Koumoriya)

美術家。1962年愛知県出身。東京藝術大学油画科卒。同大学院美術研究科修了。絵画のみならず映像美術やプロダクトデザインなど多岐にわたる分野で活動。中目黒のアンティークショップ「Koumoriya」オーナー。2018年より奥多摩町在住。

CONCEPT

奥多摩で感じられる「風の流れ」や「川の流れ」のように、形こそ見えないけれど、この土地に息づく「空気」や「気配」、「風土」のようなどとても大切な存在を可視化すること。「名勝地」や「特産物」をシンボルや象徴として擬人化する方向ではないキャラクターを作ることができないだろうか?というのが、今回のゆるキャラデザインのテーマでした。

・「水の流れ」や「風の流れ」のような形の見えないものを視覚化したキャラクター

・「象徴」や「シンボル」をキャラクターにするのではなく、奥多摩の環境に息づく「空気」や「気配」、「風土」を可視化するもの

・「分かりやすいシンボル」のようなものは何もないが、その「何もない」ことこそ、本当の意味において奥多摩を表現できるキャラクターとして昇華できないだろうか

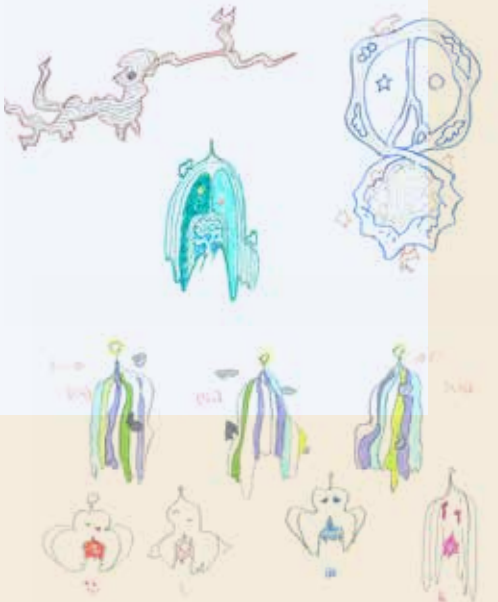
Redesign mascot...?

ご当地キャラクター、勝手にリデザインしてみました

奥多摩にこんなオフィシャルキャラクターがいたとしたら? そんなテーマで、鳩ノ巣在住の美術家・伊藤弘二さんにオリジナルの「非公式」キャラクターを描き下ろしてもらった。

PROCESS

デザイン初期のノートです。最終デザインの雛形になるものも見えます。このほかに抽象度の高いデザイン案や奥多摩湖をキャラクター化したものもあり、これらを形にしていこうとも面白そうでしたが、キャラクターとして分りにくかったり、ひとつの側面に限定しすぎてしまうとテーマから外れてしまうかもと……今回の制作では泣く泣くボツ案となりました(残念!)



Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguel] Miguel Utsunomiya [miguel] Art direction: Atsushi Kodani Design: Yasuko Kitaguchi Illustration: Toshiyuki Hirano
発行:東京都奥多摩町 <https://www.town.okutama.tokyo.jp> 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg8.so-net.ne.jp <http://www.miguel-web.info>
2024年10月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。
COVER STORY/ 今回の特集テーマに合わせて、イラストもリデザインに挑戦。一度描いた色面の上に、新たな絵を重ねている。

